

直観的思考は満足化と関係するか*

要約

本研究は、意思決定における認知と感情の関係を検討するため、大学生 131 名を対象に Cognitive Reflection Test (CRT) と後悔傾向・追求傾向の尺度を実施した。CRT は直感的誤答を促す問題を用い、分析的思考の傾向を測定する課題である。一方、後悔傾向は選択後に他の可能性を考えて満足度が下がる性質、追求傾向は最良の選択を求めて迷いや後悔を強める性質を指す。因子分析の結果、「後悔」と「追求」の二因子が抽出され、中程度の相関が確認されたが、CRT 成績とは関連がみられなかった。これは感情的側面と動機づけ的側面が密接に結びつく一方で、分析的思考との独立性を示唆する。ただし対象が大学生に限定されており、今後は多様なサンプルによる検証が求められる。

JEL 分類番号： C91, D91, O33

キーワード： Cognitive Reflection Test, 後悔・追及尺度, 因子分析

* なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

1. イントロダクション

人間の意思決定は、しばしば直感と熟考の両方のプロセスに基づいて行われる。近年、こうした意思決定過程における認知的傾向や感情的傾向の個人差に注目が集まっている。その中でも、Frederick (2005) が提案した Cognitive Reflection Test (CRT) は、直感に基づく即時的な反応に頼るのか、それとも一旦立ち止まって熟考できるのかを測定する課題として広く用いられている。CRT は、直感的に誤答へ導かれやすい問題を設定し、その解答傾向から認知スタイルを把握するものである。たとえば「バットとボールの合計が 1.10 ドルで、バットはボールより 1 ドル高い。ボールはいくらか」という問題において、多くの人が直感的に「0.10 ドル」と答えてしまうが、正解は「0.05 ドル」である。このように CRT は、直感的思考と分析的思考のバランスを評価できる指標として有効である (Frederick, 2005; Toplak, West, & Stanovich, 2011)。

一方、意思決定の感情的側面に関しては、後悔傾向と追求者（最大化）傾向が注目されてきた。後悔傾向とは、意思決定後に「他にもっと良い選択があったのではないか」と考えやすい性質を指し、選択満足度の低下に関わる (Schwartz et al., 2002)。追求者傾向は、可能な限り最良の選択を追い求める性質を示す。これは合理的に見えるが、結果的に選択への迷いや後悔を増大させることが報告されている (Iyengar, Wells, & Schwartz, 2006)。

これらの感情的傾向は、選択の満足度や心理的負担に影響する重要な要因であるが、CRT で測定される認知的反省傾向との関係は十分に明らかにされていない。先行研究では、CRT 得点の高い個人は直感に流されず分析的に考えるため、感情的反応に影響されにくい可能性が指摘されている (Pennycook, Fugelsang, & Koehler, 2015)。しかし一方で、最大化傾向や後悔傾向は熟考の有無にかかわらず強く表れる場合も考えられ、両者の関連性については議論の余地が残されている。

以上の背景を踏まえ、本研究では CRT 課題と後悔傾向・追求者傾向の尺度を実施し、両者の関連を検討する。これにより、意思決定における認知と感情の相互作用を明らかにし、意思決定研究に新たな知見を提供することを目的とする。

2. 方法

131 名の大学生が授業の一環としてデータ収集に参加し、教示文・質問文の提示、データ収集は全て Google フォームを用いて行った。参加者が回答したのは、以下の問題である。

(1) Cognitive Reflection Test

Frederick (2005) が用いた 3 問の問題を日本語に翻訳したものをを用いた。具体的な問題文は表 1 に示した。

表 1 Cognitive Reflection Test の問題文

〔問 1〕 バットとボールで合計 110 円である。バットはボールより 100 円高い。ボールはいくらか。

〔問 2〕 湖面にスイレンの葉が並んでいる。その面積は毎日 2 倍になる。48 日で湖面全体がスイレンの葉で覆われるとすると、湖の半分が覆われるまでには何日かかるか。

〔問 3〕 5 台の機械を五分間動かすと、製品が 5 つできる。100 台の機械で 100 個の製品を作るには、何分かかかるか。

(2)後悔・追及尺度

磯部ら(2008)が用いた項目のうち、研究 2(磯部ら, 2008, pp.458, Table 3)で用いられた後悔因子に対応する 8 項目、追及因子に対応する 8 項目の合計 16 項目を採用した。具体的な項目の文章は表 2 に示した。

3. 結果および考察

CRT の平均正答率・正答数を表 2 に示す。また、後悔・追及尺度の各項目得点・および CRT の正答数に対して最尤法・プロマックス回転の因子分析を行った。スクリープロット・および因子の解釈容易性から 2 因子解を採用した、各項目のまとまり方、因子負荷量から、「後悔」と「追求」の 2 因子が抽出されたと判断し、両者の間には中程度の相関が見られた。得られた因子構造および相関の傾向は、先行研究の知見とほぼ一致しており、これにより本研究における測定の妥当性と信頼性が確認されたと考えられる。ただし、CRT に対する因子負荷は両因子とも低く、後悔・追及傾向と CRT の成績との間に関連はみられなかった。

このような因子構造が出現した背景には、自己の選択や行動に対する評価を通じて感情的側面（後悔）と動機づけ的側面（追求）が心理的に密接に関連しているという、人間の意思決定における一般的な傾向が影響していると考えられる。特に、後悔の感情はより良い選択肢を求める動機と結びつくことが多く、両者の因子がある程度の相関を示すのは理にかなっている。

表 2 本研究で用いた後悔・追及尺度の項目と因子分析結果

	因子	
	後悔	追及
CRTの正答数	-0.001	0.050
何かを購入した後に、違うものにしていれば良かったという事がよくある	0.807	-0.174
選ぶのに苦労した商品でも、買った後に後悔する事が多い	0.763	-0.151
過ぎてしまった事に対して、“こうすれば良かった”など考える事がよくある	0.585	0.298
購入した商品が良かったとしても、“もっと良いものもあっただろうに”と後悔してしまうことが多い	0.623	-0.095
人生において、“あの時こうしておけば良かった”と強く思うことが多い	0.526	0.375
ある商品を購入した際、より良い商品があった可能性を考えて後悔する事がある	0.713	-0.206
くよくよ過去の事を悔やむ方だ	0.552	0.371
自分は優柔不断だと思う	0.350	0.308
可能性がある限り、物事を追求する事に苦労は惜しまない	-0.402	0.564
何かの決断をする時は、ありとあらゆる選択肢を考えてみる	-0.173	0.547
買い物の時間や、商品を選ぶ時間が他人より長いと思う	0.055	0.394
新しい商品、流行の健康法など、つねに情報収集は欠かさない	-0.212	0.083
お気に入りのもの、タレント、歌手などはとことん追求する	0.032	0.337
一つのものを買うにも、他店と比べてみる事が多い	0.005	0.409
どんな趣味でも、きわめてみたくなり、没頭するタイプである	-0.092	0.562
商品を選ぶ時は、つねに最良のものを選ぶようにしている	-0.137	0.313
因子間相関	0.395	

ただし、本研究のサンプルは大学生に限られていたため、得られた因子構造や相関の一般化可能性には一定の制限がある。今後は、より多様なサンプルを用いた調査を行い、これらの因子の妥当性および関連性の検証を行う必要がある。

以上より、本研究は、限定的なサンプルではあるものの、後悔と追求の心理的関連性および尺度構造に関する先行研究を支持しうる結果を示した。

4. 引用文献

Frederick, S. 2005. Cognitive reflection and decision making. *Journal of Economic Literature*, 19, 25-42.

磯部綾美, 久富哲兵, 松井豊, 宇井美代子, 高橋尚也, 大庭剛司, 竹村和久. 2008. 意思決定における“日本版後悔・追求者尺度”作成の試み. *心理学研究*, 79, 453-459.

Iyengar, S.S., Wells, R. E., and Schwartz, B. 2006. Doing better but feeling worse: looking for the “best” job undermines satisfaction. *Psychological Science*, 17, 143-150.

Pennycook, G., Fugelsang, J. A., and Koehler, D. 2015. Everyday consequences of analytic thinking. *Current Directions in Psychological Science*, 24, 425-432.

Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., and Lehman, D. 2002.

Maximizing versus satisficing: happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 1178-1197.

Toplak, M. E., West, R. F., and Stanovich, K. E. 2011. The Cognitive Reflection Test as a predictor of performance on heuristics-and-biases tasks. *Memory and Cognition*, 39, 1275–1289.